２　麦　類

(1)　要　旨

ア　作付面積

平成23年産４麦（小麦、二条大麦、六条大麦及びはだか麦）の子実用作付面積は27万1,700haで、前年産に比べて6,000ha（２％）増加した。（表２－１、図２－１）

イ　収穫量

平成23年産４麦の子実用収穫量は91万7,800ｔで、前年産に比べて18万5,700ｔ（25％）増加した。（表２－１、図２－１）

図２－１　４麦（子実用）の作付面積及び収穫量の推移（全国）

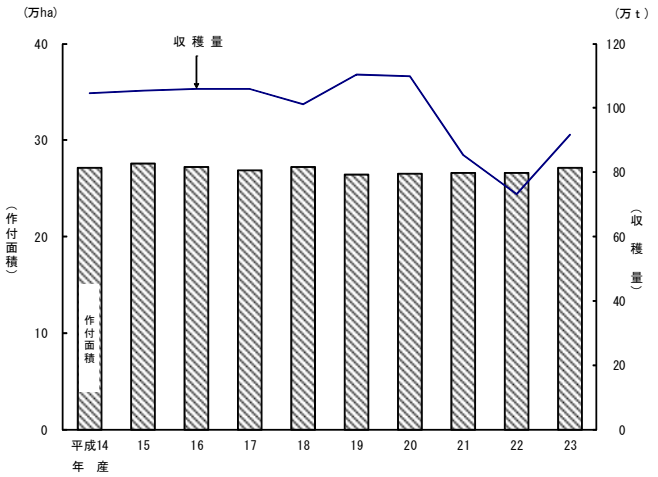


表２－１　平成23年産４麦（子実用）の作付面積、10ａ当たり収量及び収穫量

区分	作付面積	10ａ当たり収量	収穫量	前年産との比較						（参考）	
				作付面積		10ａ当たり収量	収穫量			10a当たり平均収量対比	10a当たり平均収量
				対差	対比	対比	対差	対比			
	100ha	kg	100ｔ	100ha	%	%	100ｔ	%		%	kg
全国											
４麦計	2,717	…	9,178	60	102	nc	1,857	125		nc	…
小麦	2,115	353	7,463	46	102	128	1,750	131		91	388
二条大麦	376	317	1,191	10	103	111	148	114		91	348
六条大麦	174	222	387	0	100	86	△ 61	86		74	299
はだか麦	51	267	137	4	109	107	19	116		91	295
北海道											
４麦計	1,212	…	5,058	28	102	nc	1,508	142		nc	…
小麦	1,192	419	4,999	29	102	140	1,505	143		95	439
二条大麦	20	290	59	△ 1	96	110	3	106		83	348
都府県											
４麦計	1,504	…	4,119	31	102	nc	348	109		nc	…
小麦	923	267	2,464	17	102	109	245	111		83	322
二条大麦	356	318	1,132	11	103	111	145	115		92	347
六条大麦	174	222	387	0	100	86	△ 61	86		74	299
はだか麦	51	267	137	4	109	107	19	116		91	295

注：１　「（参考）10ａ当たり平均収量対比」とは、10ａ当たり平均収量（原則として直近７か年のうち、最高及び最低を除いた５か年の平均値）に対する当年産の10ａ当たり収量の比率である（以下の各統計表について同じ。）。
２　六条大麦及びはだか麦については、北海道には作付けが無い。

表２－２　平成23年産４麦（子実用）の作付面積、10ａ当たり収量及び収穫量（全国農業地域別）

全国農業地域	４麦計		小麦				二条大麦				六条大麦				はだか麦			
	作付面積	収穫量	作付面積	10ａ当たり収量	収穫量	（参考）10ａ当たり平均収量対比	作付面積	10ａ当たり収量	収穫量	（参考）10ａ当たり平均収量対比	作付面積	10ａ当たり収量	収穫量	（参考）10ａ当たり平均収量対比	作付面積	10ａ当たり収量	収穫量	（参考）10ａ当たり平均収量対比
	100ha	100ｔ	100ha	kg	100ｔ	%	100ha	kg	100ｔ	%	100ha	kg	100ｔ	%	100ha	kg	100ｔ	%
全国	2,717	9,178	2,115	353	7,463	91	376	317	1,191	91	174	222	387	74	51	267	137	91
北海道	1,212	5,058	1,192	419	4,999	95	20	290	59	83	－	－	－	nc	－	－	－	nc
都府県	1,504	4,119	923	267	2,464	83	356	318	1,132	92	174	222	387	74	51	267	137	91
東北	95	163	81	176	143	89	0	50	0	57	14	146	21	52	－	－	－	nc
北陸	97	198	x	155	x	97	0	44	0	31	95	206	196	68	－	－	－	nc
関東・東山	402	1,240	217	303	658	92	134	332	445	99	51	264	134	87	1	269	3	79
東海	156	421	150	272	408	97	0	143	0	144	6	237	13	96	0	150	0	60
近畿	105	228	94	211	197	82	x	218	x	91	x	286	x	96	x	232	x	86
中国	46	139	15	250	37	89	27	354	96	96	1	134	1	67	4	157	6	69
四国	45	139	19	304	58	99	x	376	x	118	－	－	－	nc	26	317	81	102
九州	558	1,590	346	278	962	72	193	304	587	86	－	－	－	nc	19	224	42	78
沖縄	x	x	0	218	0	137	x	x	x	x	－	－	－	nc	－	－	－	nc

(2) 解　説

ア　小麦（子実用）

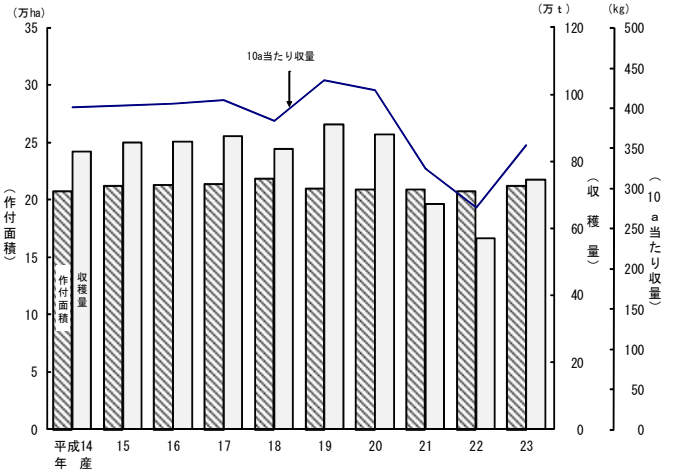
(ｱ)　作付面積

小麦の子実用作付面積は21万1,500haで、農業者戸別所得補償制度の本格実施に伴い、前年産に比べて4,600ha（２％）増加した。

このうち、北海道は11万9,200haで、前年産に比べて2,900ha（２％）増加した。

（表２－１、２－２、図２－２）

図２－２　小麦の作付面積、収穫量及び10ａ当たり収量の推移（全国）



(ｲ)　10ａ当たり収量

10ａ当たり収量は353kgで、前年産に比べて28％上回った。

（表２－１、２－２、図２－２）

ａ　北 海 道

10ａ当たり収量は419kgで、前年産に比べて40％上回った。

これは、７月下旬から８月中旬にかけての高温等の影響による登熟の抑制等はあったものの、前年産の作柄が悪かったこと等による。

（表２－１、２－２、図２－３）

ｂ　都 府 県

10ａ当たり収量は267kgで、前年産に比べて９％上回った。

これは、春先の低温や５月中下旬の降雨等の影響による生育の抑制等はあったものの、前年産の作柄が悪かったこと等による。（表２－１、２－２、図２－４）

(ｳ) 収穫量

収穫量は74万6,300ｔで、前年産に比べて17万5,000ｔ（31%）増加した。

このうち、北海道の収穫量は49万9,900tで、作付面積が前年産に比べて2,900ha（２%）増加したことに加え、10ａ当たり収量が前年産を40%上回ったため、前年産に比べて15万500ｔ（43%）増加した。

一方、都府県の収穫量は24万6,400tで、作付面積が前年産に比べて1,700ha（２%）増加したことに加え、10ａ当たり収量が前年産を９%上回ったため、前年産に比べて２万4,500t（11%）増加した。

（表２－１、２－２、図２－２）

図２－３　平成23年産麦作期間の半旬別気象経過（帯広）

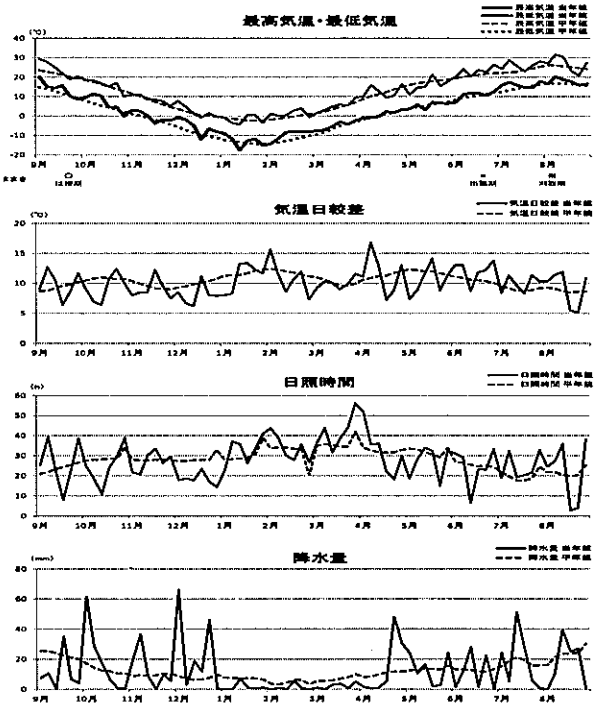
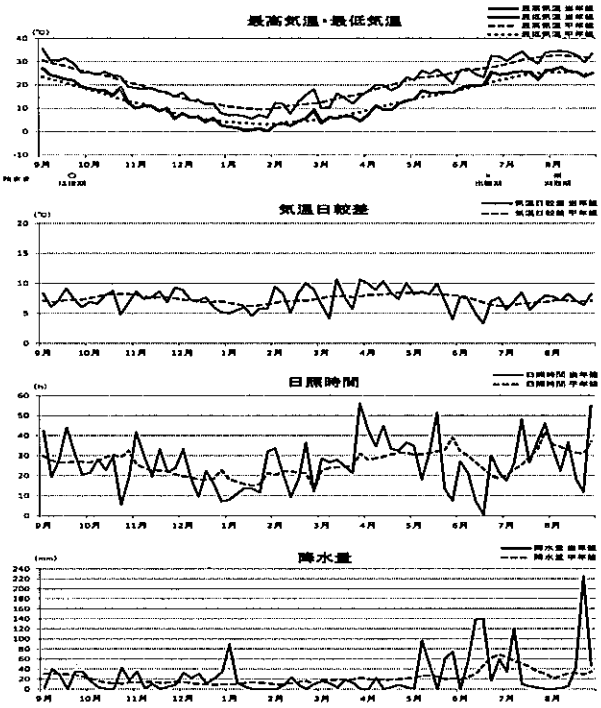


図２－４　平成23年産麦作期間の半旬別気象経過（福岡）



イ　二条大麦（子実用）

(ｱ)　作付面積

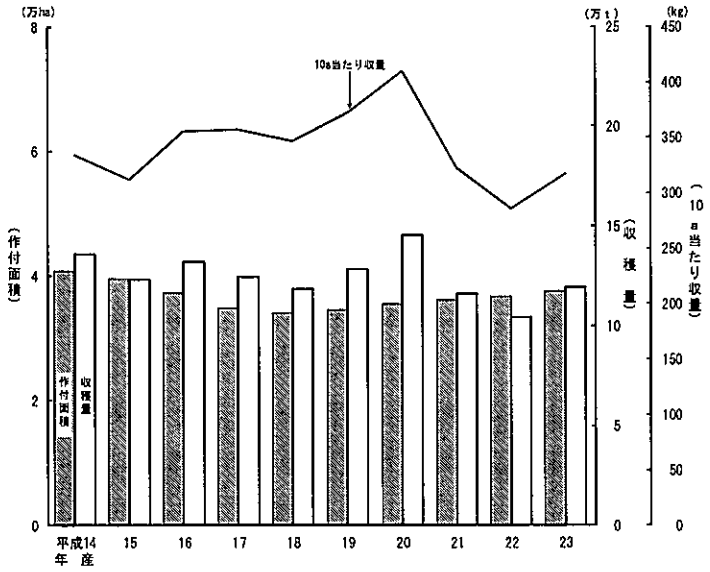
二条大麦の子実用作付面積は３万7,600haで、前年産に比べて1,000ha（３％）増加した。

このうち、北海道は2,030haで、小麦への転換等により前年産に比べて80ha（４％）減少した。

一方、都府県は３万5,600haで、九州地域等において農業者戸別所得補償制度の本格実施に伴う増加や、栃木県等においてビール用の作付け拡大により前年産に比べて1,100ha（３％）増加した。

（表２－１、２－２、図２－５）

図２－５　二条大麦の作付面積、収穫量及び10ａ当たり収量の推移（全国）



(ｲ)　10ａ当たり収量

10ａ当たり収量は317kgで、前年産に比べて11%上回った。

これは、春先の低温や５月中下旬の降雨等の影響による生育の抑制等はあったものの、前年産の作柄が悪かったこと等による。（表２－１、２－２、図２－５、２－６、２－７）

(ｳ)　収穫量

収穫量は11万9,100tで、前年産に比べて１万4,800t（14%）増加した。

これは、作付面積が前年産に比べて1,000ha（３％）増加したことに加え、10ａ当たり収量が前年産を11%上回ったためである。（表２－１、２－２、図２－５）

図２－６　平成23年産麦作期間の半旬別気象経過（福岡）

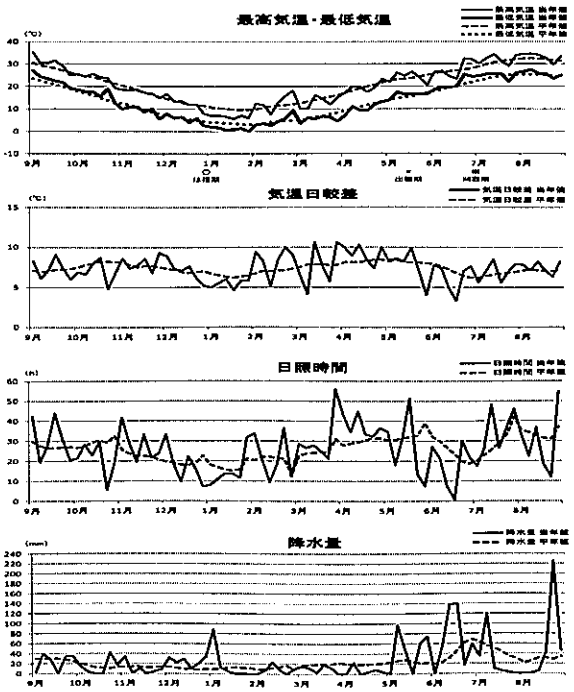
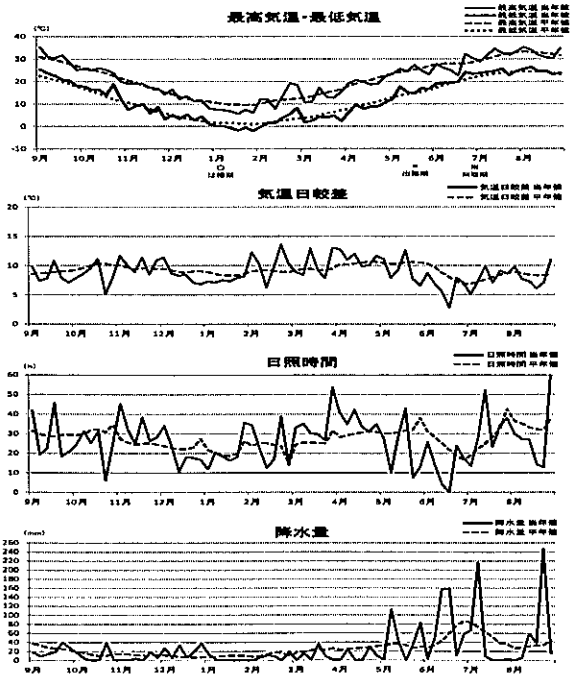


図２－７　平成23年産麦作期間の半旬別気象経過（佐賀）



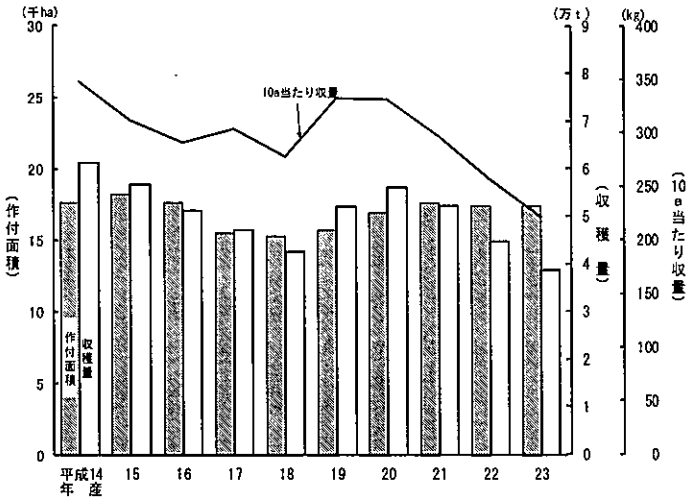
ウ　六条大麦（子実用）

(ｱ)　作付面積

六条大麦の子実用作付面積は1万7,400haで、前年産並みとなった。

（表２－１、２－２、図２－８）

図２－８　六条大麦の作付面積、収穫量及び10ａ当たり収量の推移（全国）



(ｲ)　10ａ当たり収量

10ａ当たり収量は222kgで、前年産に比べて14%下回った。

これは、北陸地域を中心に、降雪量が多かったことによる融雪の遅れやその後の気温が平年を下回ったことにより、生育が抑制された影響等による。

（表２－１、２－２、図２－８、２－９、２－10）

(ｳ)　収穫量

収穫量は３万8,700tで、前年産に比べて6,100t（14%）減少した。

これは、作付面積は前年産並みだったものの、10ａ当たり収量が前年産を14%下回ったためである。

（表２－１、２－２、図２－８）

図２－９　平成23年産麦作期間の半旬別気象経過（富山）

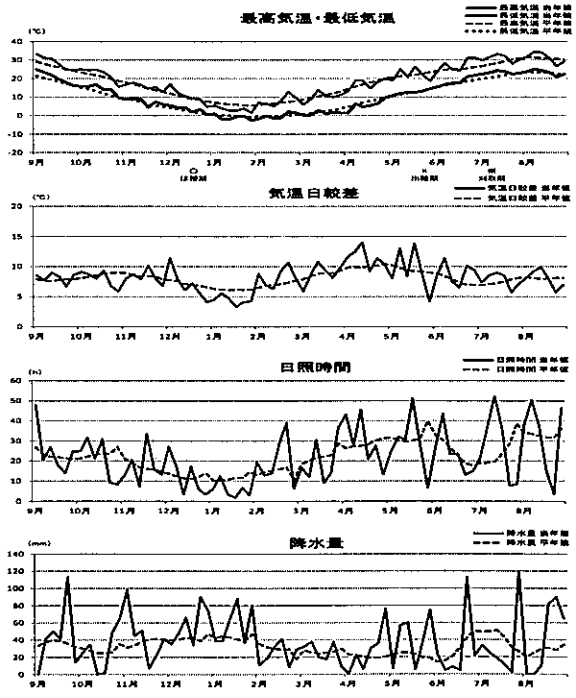
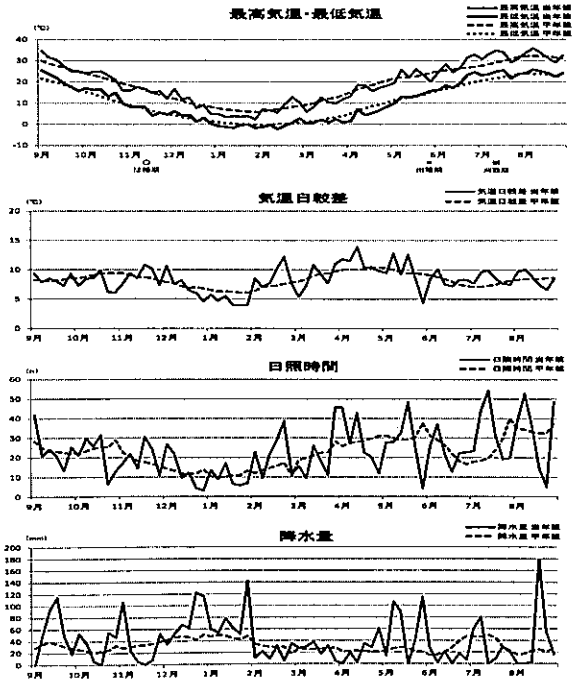


図２－10　平成23年産麦作期間の半旬別気象経過（福井）



エ　はだか麦（子実用）

(ｱ)　作付面積

はだか麦の子実用作付面積は5,130haで、九州、中国地域等において農業者戸別所得補償制度の本格実施に伴い、前年産に比べて410ha（９％）増加した。

（表２－１、２－２、図２－11）

(ｲ)　10ａ当たり収量

10ａ当たり収量は267kgで、前年産に比べて７％上回った。

これは、大分県等において春先の低温や５月下旬の降雨の影響による生育の抑制等はあったものの、前年産の作柄が悪かったこと等による。（表２－１、２－２、図２－11、２－12）

(ｳ)　収穫量

収穫量は１万3,700tで、前年産に比べて1,900t（16％）増加した。

これは、作付面積が前年産に比べて410ha（９％）増加したことに加えて、10ａ当たり収量が前年産を７％上回ったためである。（表２－１、２－２、図２－11）

図２－11　はだか麦の作付面積、収穫量及び10ａ当たり収量の推移（全国）

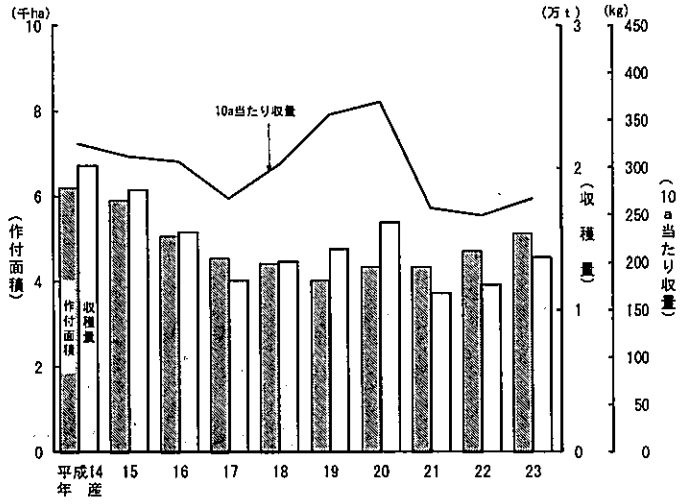
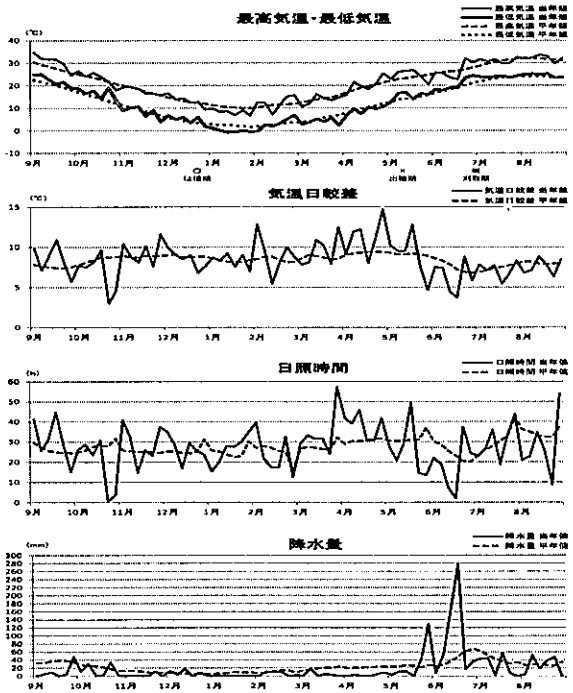


図２－12　平成23年産麦作期間の半旬別気象経過（大分）



３　豆　類・そ　ば

(1)　要　旨

平成23年産の豆類（乾燥子実）の全国の収穫量は、大豆が21万8,800ｔで前年産に比べて3,700ｔ（２%）減少し、小豆が６万ｔで前年産に比べて5,100ｔ（９%）増加した。いんげんは9,870ｔで、前年産に比べて１万2,100ｔ（55%）減少した。らっかせいは２万300ｔで、前年産に比べて4,100ｔ（25%）増加した。

また、平成23年産そばの収穫量は３万2,000ｔで前年産に比べて2,300ｔ（８%）増加した。（表３）

表３　平成23年産豆類（乾燥子実）及びそばの作付面積、10ａ当たり収量及び収穫量

区分	作付面積	10ａ当たり収量	収穫量	前年産との比較						（参考）	
				作付面積		10ａ当たり収量	収穫量			10ａ当たり平均収量対比	10ａ当たり平均収量
				対差	対比	対比	対差	対比			
	ha	kg	t	ha	%	%	t	%		%	kg
大豆	136,700	160	218,800	△ 1,000	99	99	△ 3,700	98		96	166
小豆	30,600	196	60,000	△ 100	100	109	5,100	109		nc	…
いんげん	10,200	97	9,870	△ 1,400	88	51	△ 12,100	45		nc	…
らっかせい	7,440	273	20,300	△ 280	96	130	4,100	125		nc	…
そば	56,400	57	32,000	8,700	118	92	2,300	108		nc	…

注：　小豆、いんげん及びらっかせいの収穫量調査は主産県調査であり、３年周期で全国調査を実施している。平成23年産については主産県を対象に調査を実施した。
なお、全国値は主産県調査結果と主産県以外の推計値を合算したものである。

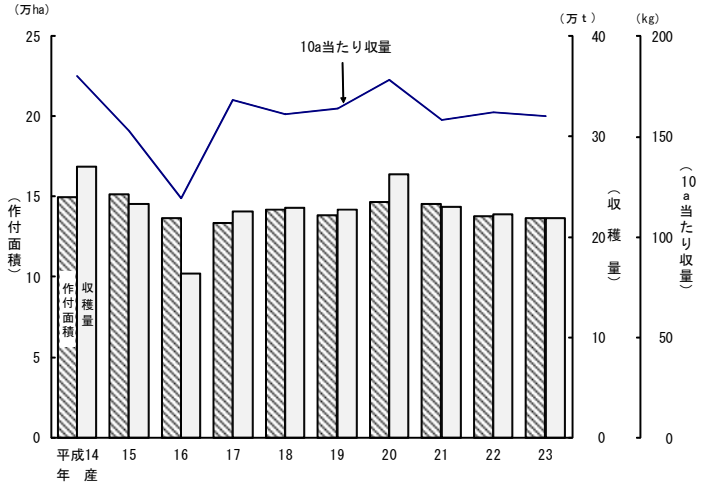
(2)　解　説

ア　大豆（乾燥子実）

(ｱ)　作付面積

平成23年産大豆の作付面積は13万6,700haで、前年産に比べて1,000ha（１%）減少した。（表３、図３－１）

図３－１　大豆の作付面積、収穫量及び10ａ当たり収量の推移（全国）



(ｲ)　10ａ当たり収量

10ａ当たり収量は160kgで、前年産に比べて１％下回った。（表３、図３－１）

(ｳ)　収穫量

収穫量は21万8,800ｔで、前年産に比べて3,700ｔ（２％）減少した。

これは、作付面積が前年産に比べて減少したことに加えて、10ａ当たり収量が前年産を下回ったためである。（表３、図３－１）

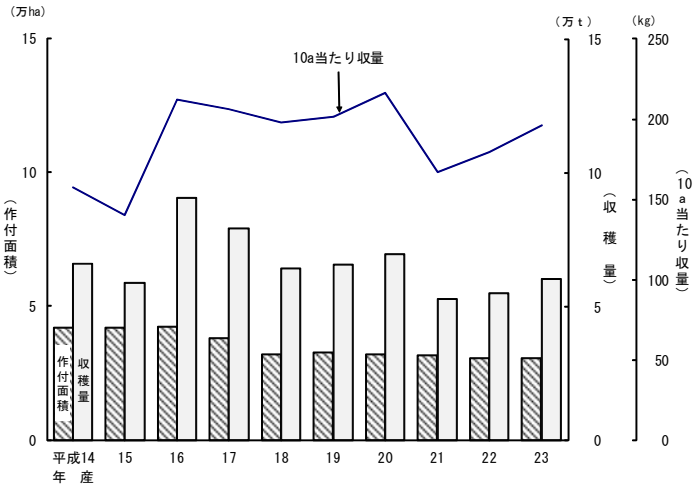
イ　小豆（乾燥子実）

(ｱ)　作付面積

平成23年産小豆の作付面積は３万600haで、前年産並みとなった。

このうち、全国の約８割を占める北海道の作付面積は２万3,800haで、前年産に比べて600ha（３％）増加した。（表３、図３－２）

図３－２　小豆の作付面積、収穫量及び10ａ当たり収量の推移（全国）



(ｲ)　10ａ当たり収量

10ａ当たり収量は196kgで、前年産に比べて９％上回った。

これは、主産地である北海道等において前年産を上回ったためである。（表３、図３－２）

(ｳ)　収穫量

収穫量は６万ｔで、前年産に比べて5,100ｔ（９％）増加した。

これは、10ａ当たり収量が前年産を上回ったためである。（表３、図３－２）

ウ　いんげん（乾燥子実）

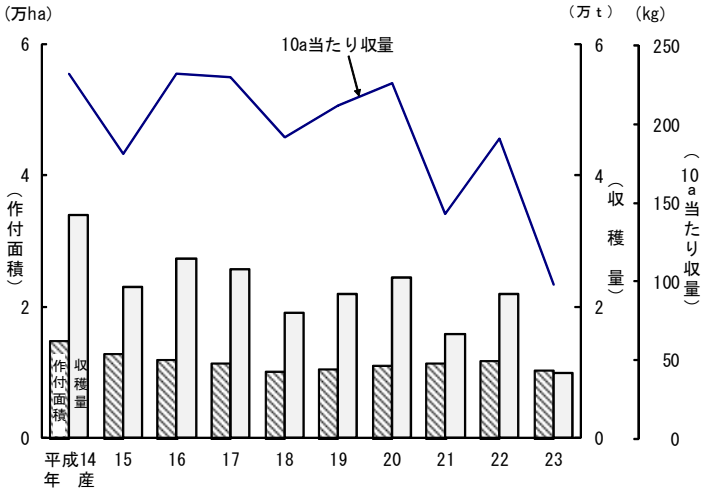
(ｱ)　作付面積

平成23年産いんげんの作付面積は１万200haで、前年産に比べて1,400ha（12%）減少した。

このうち、全国の約９割を占める北海道の作付面積は9,330haで、小豆への転換等により、前年産に比べて1,470ha（14%）減少した。

（表３、図３－３）

図３－３　いんげんの作付面積、収穫量及び10ａ当たり収量の推移（全国）



(ｲ)　10ａ当たり収量

10ａ当たり収量は97kgで、前年産に比べて49%下回った。

これは、主産地である北海道において、秋雨前線による長雨や台風第12号の影響により色流れ粒等が多く発生したためである。

（表３、図３－３）

(ｳ)　収穫量

収穫量は9,870ｔで、前年産に比べて１万2,100ｔ（55%）減少した。

これは、作付面積が前年産に比べて減少したことに加えて、10ａ当たり収量が前年産を下回ったためである。（表３、図３－３）

エ　らっかせい（乾燥子実）

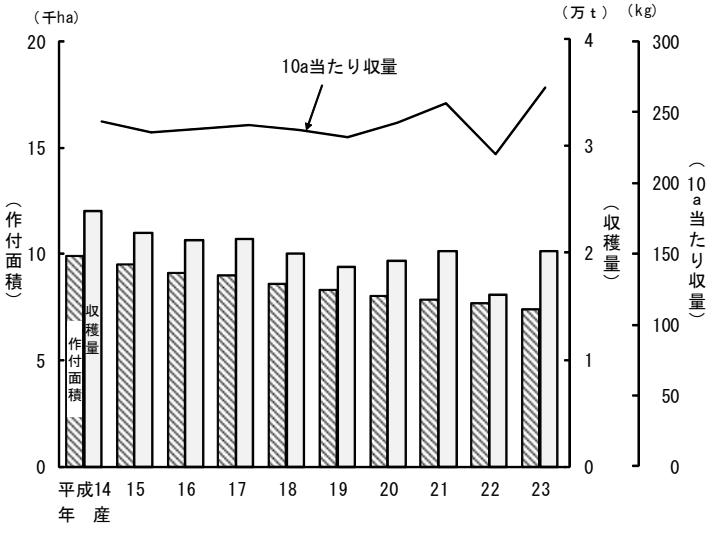
(ｱ)　作付面積

平成23年産らっかせいの作付面積は7,440haで、前年産に比べて280ha（４%）減少した。

このうち、全国の約８割を占める千葉県の作付面積は5,580haで、前年産に比べて110ha（２%）減少した。

（表３、図３－４）

図３－４　らっかせいの作付面積、収穫量及び10ａ当たり収量の推移（全国）



(ｲ)　10ａ当たり収量

10ａ当たり収量は273kgで、前年産に比べて30%上回った。

これは、茨城県及び千葉県において、天候に恵まれ生育が良好であったためである。

（表３、図３－４）

(ｳ)　収穫量

収穫量は２万300ｔで、前年に比べて4,100ｔ（25%）増加した。

これは、作付面積が前年産に比べて減少したものの、10ａ当たり収量が前年産を上回ったためである。（表３、図３－４）

オ　そば

(ｱ)　作付面積

平成23年産そばの作付面積は５万6,400haで、前年産に比べて8,700ha（18%）増加した。

これは、農業者戸別所得補償制度の本格実施に伴い作付けが増加したことによるものである。

(ｲ)　10ａ当たり収量

10ａ当たり収量は57kgで、前年産に比べて８%下回った。

これは、北海道等において秋雨前線による長雨や台風第12号・第15号等の影響により、倒伏、脱粒等が多く発生したことによるものである。

(ｳ)　収穫量

収穫量は３万2,000ｔで、前年産に比べて2,300ｔ（８%）増加した。

これは、10ａ当たり収量は前年産を下回ったものの、作付面積が増加したためである。

（表３）

４　かんしょ

(1)　作付面積

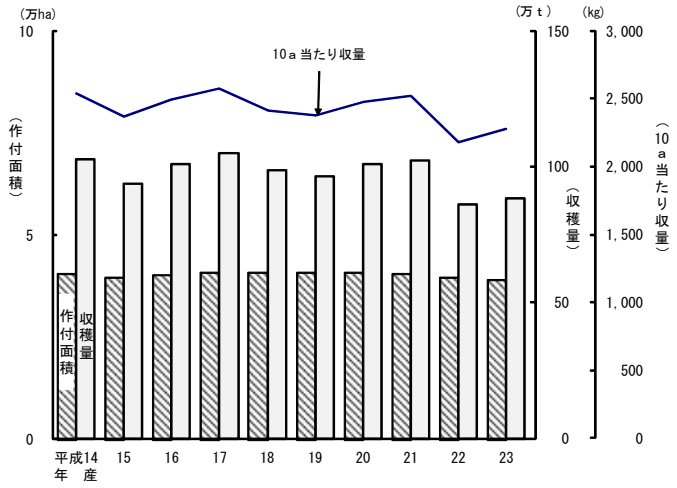
平成23年産かんしょの作付面積は３万8,900haで、前年産に比べ800ha（２%）減少した。（表４、図４）

(2)　10ａ当たり収量

10ａ当たり収量は2,280kgで、前年産に比べて５%上回った。

これは、挿苗期の低温、日照不足等の影響による生育の抑制はあったものの、前年産の作柄が悪かったこと等による。（表４、図４）

図４　かんしょの作付面積、収穫量及び10ａ当たり収量の推移（全国）



(3)　収穫量

収穫量は88万5,900ｔで、前年産に比べて２万2,300ｔ（３%）増加した。

これは、作付面積が前年産に比べて減少したものの、10ａ当たり収量が前年産を上回ったことによる。（表４、図４）

表４　平成23年産かんしょの作付面積、10ａ当たり収量及び収穫量（全国）

区分	作付面積	10ａ当たり収量	収穫量	前年産との比較						（参考）	
				作付面積		10ａ当たり収量	収穫量			10ａ当たり平均収量対比	10ａ当たり平均収量
				対差	対比	対比	対差	対比			
	ha	kg	t	ha	%	%	t	%		%	kg
全国	38,900	2,280	885,900	△ 800	98	105	22,300	103		nc	…
うち茨城	6,530	2,530	165,200	50	101	105	9,500	106		97	2,620
千葉	4,610	2,510	115,700	△ 90	98	117	15,100	115		100	2,510
静岡	847	1,700	14,400	△ 11	99	120	2,200	118		87	1,960
愛知	452	1,370	6,190	△ 23	95	99	△ 410	94		83	1,650
徳島	1,150	2,180	25,100	△ 10	99	95	△ 1,600	94		90	2,430
長崎	435	1,420	6,180	△ 24	95	100	△ 360	94		82	1,740
熊本	1,200	2,300	27,600	△ 10	99	103	600	102		100	2,310
宮崎	3,000	2,400	72,000	△ 40	99	94	△ 5,200	93		91	2,630
鹿児島	14,000	2,500	350,000	△ 300	98	103	2,500	101		87	2,870

注：１　かんしょの収穫量調査は主産県調査であり、３年周期で全国調査を実施している。平成23年産については全国の都道府県を対象に調査を行った。
２　主産県とは、全国のかんしょ作付面積のおおむね80%を占めるまでの上位都道府県である。

５　飼料作物

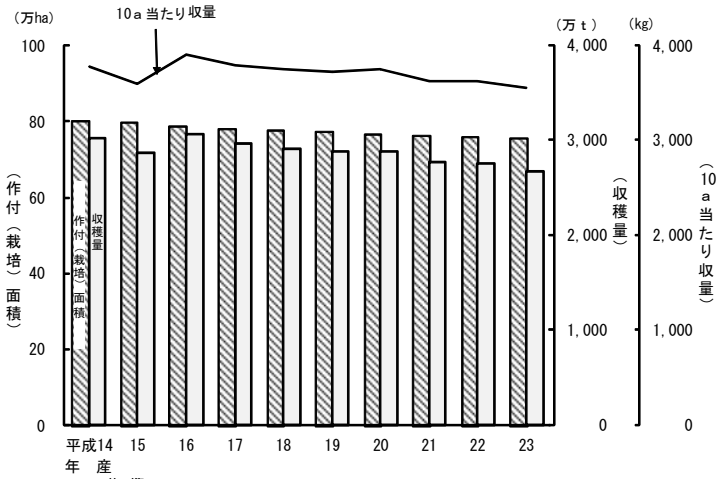
(1) 牧草

ア　作付（栽培）面積

平成23年産牧草の作付(栽培)面積は75万5,100haで、前年産に比べて4,000ha（１％）減少した。

（表５－１、図５－１）

図５－１　牧草の作付（栽培）面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）



イ　10ａ当たり収量

10ａ当たり収量は3,550kgで、前年産に比べて２％下回った

これは、北海道は天候に恵まれ生育がおおむね良好であったものの、その他の地域の多くでは春先の低温等により生育が抑制されたことに加えて、東北・関東の一部地域で東京電力福島第一原子力発電所事故に伴う給与自粛措置がとられたことの影響等による。（表５－１、図５－１）

ウ　収穫量

収穫量は2,678万3,000ｔで、前年産に比べて79万7,000ｔ（３％）減少した。

これは、作付（栽培）面積が前年産に比べて減少したことに加えて、10ａ当たり収量が前年産を下回ったことによる。（表５－１、図５－１）

表５－１　平成23年産牧草の作付（栽培）面積、10ａ当たり収量及び収穫量

区分	作付(栽培)面積	10ａ当たり収量	収穫量	前年産との比較						（参考）	
				作付(栽培)面積		10ａ当たり収量	収穫量			10ａ当たり平均収量対比	10ａ当たり平均収量
				対差	対比	対比	対差	対比			
	ha	kg	t	ha	%	%	t	%		%	kg
全国	755,100	3,550	26,783,000	△ 4,000	99	98	△ 797,000	97		nc	…
うち北海道	551,200	3,360	18,520,000	△ 2,300	100	101	144,000	101		99	3,380

注：１　飼料作物の収穫量調査は主産県調査であり、３年周期で全国調査を実施している。平成23年産については全国の都道府県を対象に調査を行った（以下表５－２及び表５－３について同じ。）。

２　主産県とは、全国の作付（栽培）面積のおおむね80％を占めるまでの上位都道府県及び戸別所得補償実施円滑化基盤整備事業のうち飼料作物に係るものを実施する都道府県である。

(2) 青刈りとうもろこし

ア　作付面積

平成23年産青刈りとうもろこしの作付面積は９万2,200haで、前年産並みとなった。

（表５－２、図５－２）

イ　10ａ当たり収量

10ａ当たり収量は5,110kgで、前年産に比べて１％上回った。

これは、北海道において、天候に恵まれ生育が良好であったことによる。

（表５－２、図５－２）

ウ　収穫量

収穫量は471万3,000ｔで、前年産に比べて７万ｔ（２％）増加した。

（表５－２、図５－２）

図５－２　青刈りとうもろこしの作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）

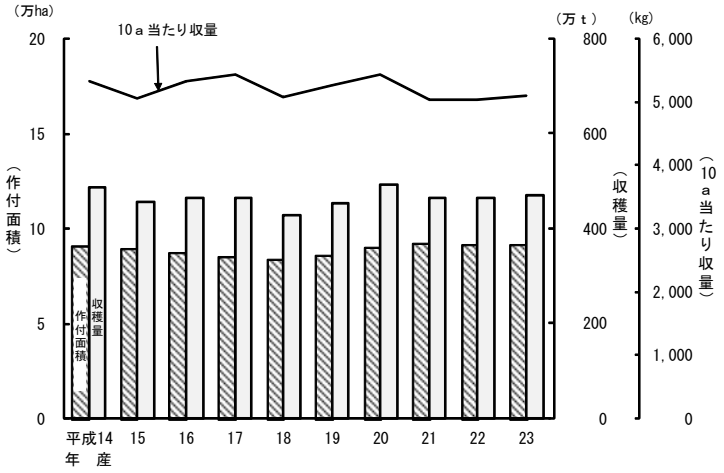


表５－２　平成23年産青刈りとうもろこしの作付面積、10ａ当たり収量及び収穫量

区分	作付面積	10ａ当たり収量	収穫量	前年産との比較					（参考）	
				作付面積		10ａ当たり収量	収穫量		10ａ当たり平均収量対比	10ａ当たり平均収量
				対差	対比	対比	対差	対比		
	ha	kg	t	ha	%	%	t	%	%	kg
全国	92,200	5,110	4,713,000	0	100	101	70,000	102	nc	…
うち北海道	48,200	5,400	2,603,000	1,500	103	103	165,000	107	102	5,300

(3) ソルゴー

ア　作付面積

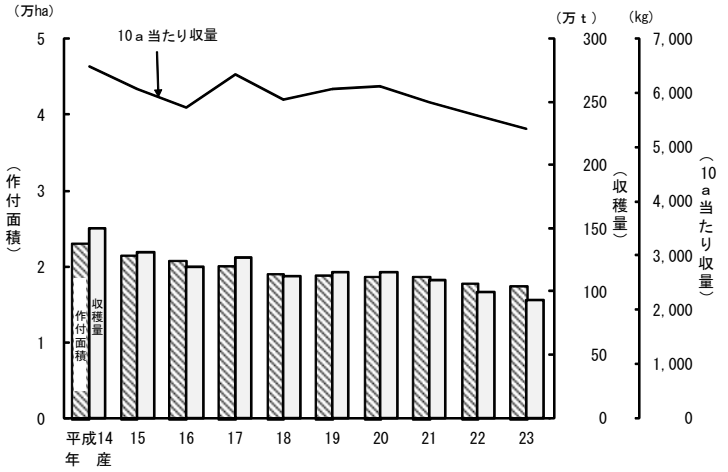
平成23年産ソルゴーの作付面積は１万7,600haで、前年産に比べて300ha（２％）減少した。（表５－３、図５－３）

イ　10ａ当たり収量

10ａ当たり収量は5,340kgで、前年産に比べて４％下回った。

これは、九州において、５月下旬から６月中旬の日照不足、台風第６号の影響等により生育が抑制されたことによる。（表５－３、図５－３）

図５－３　ソルゴーの作付面積、収穫量及び10ａ当たり収量の推移（全国）



ウ　収穫量

収穫量は93万9,200ｔで、前年産に比べて６万1,800ｔ（６％）減少した。

これは、作付面積が前年産に比べて減少したことに加えて、10ａ当たり収量が前年産を下回ったことによる。（表５－３、図５－３）

表５－３　平成23年産ソルゴーの作付面積、10ａ当たり収量及び収穫量

区分	作付面積	10ａ当たり収量	収穫量	前年産との比較						（参考）	
				作付面積		10ａ当たり収量	収穫量			10ａ当たり平均収量対比	10ａ当たり平均収量
				対差	対比	対比	対差	対比			
	ha	kg	t	ha	%	%	t	%		%	kg
全国	17,600	5,340	939,200	△ 300	98	96	△ 61,800	94		nc	…
うち長崎	2,170	5,420	117,600	△ 100	96	98	△ 7,800	94		93	5,820
熊本	1,290	6,030	77,800	△ 130	91	103	△ 5,100	94		100	6,020
大分	1,140	5,190	59,200	0	100	91	△ 5,800	91		79	6,570
宮崎	3,820	5,530	211,200	150	104	92	△ 9,700	96		90	6,170
鹿児島	2,460	6,830	168,000	0	100	98	△ 3,200	98		94	7,290

６　工芸農作物

(1)　茶

ア　栽培面積（全国）

平成23年産茶の栽培面積は４万６,200haで、前年産に比べて600ha（１％）減少した。（表６－１）

表６－１　茶の栽培面積（全国）

単位：ha

区　　分	栽　培　面　積
平成22年産	46,800
23	46,200
対前年産比（％）	99

イ　摘採実面積（主産県）

主産県の茶の摘採実面積（収穫面積）は３万8,600haで、前年産に比べて400ha（１％）減少した。（表６－２）

ウ　生葉収穫量（主産県）

主産県の茶の生葉収穫量は38万2,200ｔで、前年産に比べて2,500ｔ（１％）減少した。

これは、摘採実面積が前年産に比べて減少したことによる。（表６－２）

エ　荒茶生産量（主産県）

主産県の荒茶生産量は８万2,100ｔで、前年産に比べて900ｔ（１％）減少した。

これは、生葉収穫量が前年産に比べて減少したことによる。

府県別にみると、静岡県が３万3,500ｔ（荒茶生産量の41％）、次いで鹿児島県が２万3,800ｔ（同29％）、三重県が7,350ｔ（同９％）となっている。（表６－２、図６－１）

図６－１　荒茶生産量（主産県）

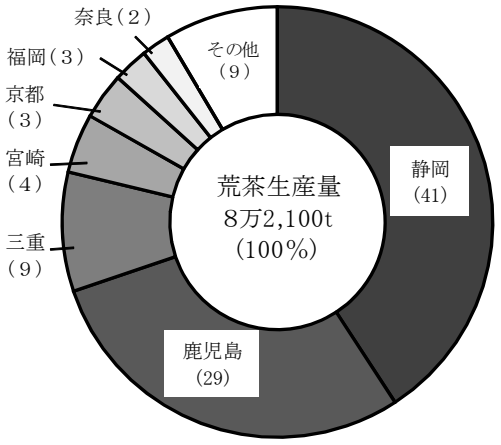


表６－２　平成23年産摘採面積、10ａ当たり生葉収量、生葉収穫量及び荒茶生産量（主産県）

区　　分	摘採面積		10ａ当たり生葉収量			生葉収穫量			荒茶生産量		
	実面積	延べ面積		一番茶	二番茶		一番茶	二番茶		一番茶	二番茶
	ha	ha	kg	kg	kg	t	t	t	t	t	t
平成22年産	39,000	87,700	986	427	460	384,700	166,600	117,300	83,000	34,400	24,200
23	38,600	86,700	990	428	463	382,200	165,400	116,800	82,100	34,000	23,900
対前年産比（%）	99	99	100	100	101	99	99	100	99	99	99

注：　主産県とは、全国の荒茶生産量（平成21年産）のおおむね80%を占めるまでの上位都道府県に加えて、畑作物共済事業等を実施する都道府県である。

(2) なたね

ア　作付面積

平成23年産なたねの作付面積は1,700haで、前年産に比べて10ha（１％）増加した。

これは、他作物への転換等による減少があったものの、農業者戸別所得補償制度の本格実施等により増加したためである。（表６－３、図６－２）

イ　10ａ当たり収量

10ａ当たり収量は115kgで、前年産に比べて24％上回った。

これは、北海道、青森等において作柄の悪かった前年産に比べて、収穫期の天候におおむね恵まれたためである。（表６－３）

ウ　収穫量

収穫量は1,950ｔで、前年産に比べて380ｔ（24％）増加した。

これは、10ａ当たり収量が前年産を上回ったためである。（表６－３）

図６－２　なたねの作付面積

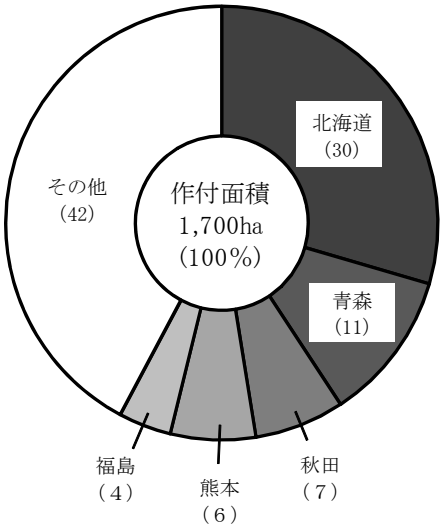


表６－３　平成23年産なたねの作付面積、10ａ当たり収量及び収穫量

区分	作付面積	10ａ当たり収量	収穫量	前年産との比較						（参考）	
				作付面積		10ａ当たり収量	収穫量			収穫面積	収穫面積に対する10ａ当たり収量
				対差	対比	対比	対差	対比			
	ha	kg	t	ha	%	%	t	%		ha	kg
全国	1,700	115	1,950	10	101	124	380	124		1,610	121

(3) てんさい

ア　作付面積

平成23年産てんさいの作付面積は６万500haで、前年産に比べて2,100ha（３％）減少した。

これは、小麦、そば等への転換があったこと等による。（表６－４、図６－３）

イ　10ａ当たり収量

10ａ当たり収量は5,860kgで、前年産に比べて19%上回った。

これは、移植の遅れの影響により生育に抑制がみられた地域があったものの、全般的に褐斑病等が多発した前年産に比べて被害が少なかったためである。（表６－４、図６－３）

ウ　収穫量

収穫量は354万7,000ｔで、前年産に比べて45万7,000ｔ（15%）増加した。

これは、作付面積が減少したものの、10a当たり収量が前年産を上回ったためである。（表６－４、図６－３）

図６－３　てんさいの作付面積、収穫量及び10ａ当たり収量の推移

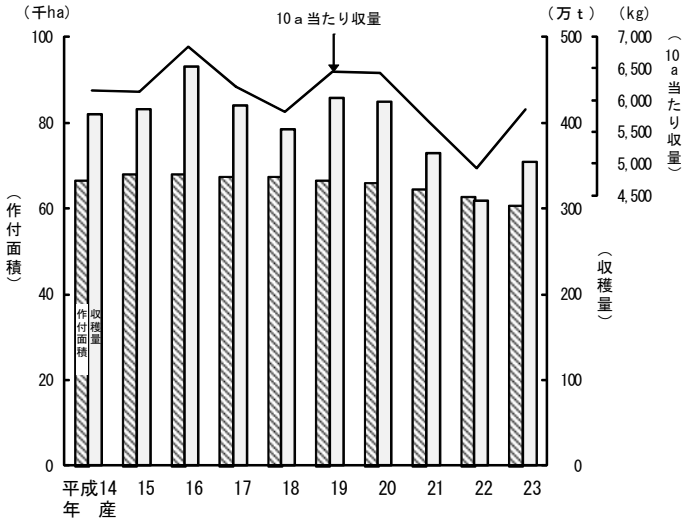


表６－４　平成23年産てんさいの作付面積、10ａ当たり収量及び収穫量

区分	作付面積	10ａ当たり収量	収穫量	前年産との比較						（参考）	
				作付面積		10ａ当たり収量	収穫量			10ａ当たり平均収量対比	10ａ当たり平均収量
				対差	対比	対比	対差	対比			
	ha	kg	t	ha	%	%	t	%		%	kg
北海道	60,500	5,860	3,547,000	△ 2,100	97	119	457,000	115		96	6,120

注：調査は、北海道を対象に行っている。

(4) さとうきび

ア 収穫面積

平成23年産さとうきびの収穫面積は２万2,600haで、前年産に比べて600ha（３％）減少した。（表６－５、図６－４）

イ 10ａ当たり収量

10ａ当たり収量は4,420kgで、前年産に比べて30％下回り、沖縄県を含めて統計をとり始めた昭和49年産以降で最も低い水準となった。

これは、台風第２号、第９号及び第15号による被害に加えて、春先の低温及び日照不足の影響等により生育が抑制されたためである。（表６－５、図６－４）

ウ 収穫量

収穫量は100万ｔで、前年産に比べて46万9,000ｔ（32％）減少し、沖縄県を含めて統計をとり始めた昭和49年産以降で最も低い水準となった。

これは、収穫面積が前年産に比べて減少したことに加えて、10ａ当たり収量が前年産を大きく下回ったためである。（表６－５、図６－４）

図６－４ さとうきびの収穫面積、収穫量及び10ａ当たり収量の推移

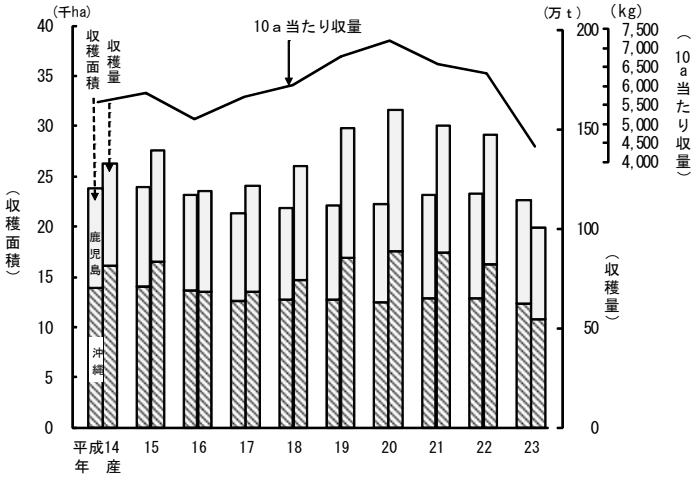


表６－５ 平成23年産さとうきびの作型別栽培・収穫面積、10ａ当たり収量及び収穫量

区分	栽培面積	収穫面積				10ａ当たり収量			
		計	夏植え	春植え	株出し	計	夏植え	春植え	株出し
	ha	ha	ha	ha	ha	kg	kg	kg	kg
全国 平成22年産	31,200	23,200	6,950	4,060	12,200	6,330	8,000	5,540	5,640
23	30,500	22,600	6,630	4,170	11,800	4,420	5,100	4,240	4,120
前年産との比較（％）	98	97	95	103	97	70	64	77	73
鹿児島	12,000	10,300	1,340	2,410	6,580	4,450	4,950	4,510	4,310
前年産との比較（％）	98	98	91	105	98	72	63	76	73
沖縄	18,500	12,300	5,280	1,770	5,250	4,400	5,150	3,830	3,850
前年産との比較（％）	98	96	97	100	95	69	64	76	73

区分	収穫量			
	計	夏植え	春植え	株出し
	t	t	t	t
全国 平成22年産	1,469,000	556,100	224,900	687,700
23	1,000,000	338,000	176,600	485,700
前年産との比較（％）	68	61	79	71
鹿児島	458,800	66,300	108,800	283,700
前年産との比較（％）	71	57	80	72
沖縄	541,500	271,700	67,800	202,000
前年産との比較（％）	66	62	77	69

注：調査は、鹿児島県及び沖縄県を対象に行っている。

(5) こんにゃくいも（主産県）

ア　栽培面積・収穫面積

主産県のこんにゃくいもの平成23年産栽培面積は3,660haで、前年産に比べて30ha（１％）減少した。

また、主産県の収穫面積は2,010haで、前年産に比べて140ha（７％）減少した。

これは、群馬県において前年産の２年生のいもの肥大状況が良好で、その一部が収穫（種いもとしての収納を除く。）されたことから、本年に収穫用として植え付ける種いもが少なくなったためである。（表６－６、図６－５）

イ　10ａ当たり収量

主産県の10ａ当たり収量は2,880kgで、前年産に比べて４％下回った。

これは、台風12号及び15号の影響による葉柄の損傷や病害の発生、９月下旬の低温の影響等により、根部の肥大が抑制されたためである。（表６－６、図６－５）

ウ　収穫量

主産県の収穫量は５万7,800ｔで、前年産に比べて6,800ｔ（11%）減少した。

これは、収穫面積が前年産に比べて減少したことに加えて、10ａ当たり収量が前年産を下回ったためである。

（表６－６、図６－５）

図６－５　こんにゃくいもの収穫面積、収穫量及び10ａ当たり収量の推移（主産県）

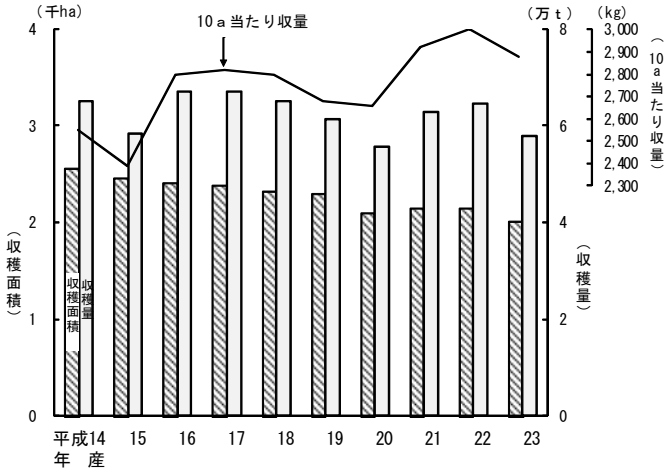


表６－６　平成23年産こんにゃくいもの栽培・収穫面積、10ａ当たり収量及び収穫量（主産県）

区分	栽培面積	収穫面積	10ａ当たり収量	収穫量	前年産対比				（参考）	
					栽培面積	収穫面積	10ａ当たり収量	収穫量	10ａ当たり平均収量対比	10ａ当たり平均収量
	ha	ha	kg	t	%	%	%	%	%	kg
主産県計	**3,660**	**2,010**	**2,880**	**57,800**	**99**	**93**	**96**	**89**	**103**	**2,800**
栃木	168	101	2,380	2,400	97	98	93	91	92	2,580
群馬	3,490	1,910	2,900	55,400	99	93	96	89	103	2,810

注：１　こんにゃくいもの収穫量調査は主産県調査で３年周期で全国調査を実施しており、平成23年産については主産県を対象に調査を実施した。
　　２　主産県とは、全国のこんにゃくいも収穫面積のおおむね80%を占めるまでの上位都道府県である。

(6) い（主産県）

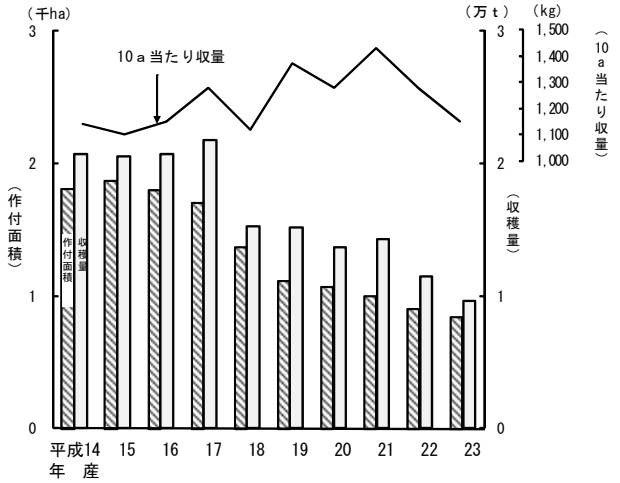
ア　作付面積

主産県（福岡県及び熊本県）の「い」の平成23年産作付面積は838haで、前年産に比べて61ha（７％）減少した。

これは、畳表の需要の減少等により、他作物への転換等があったためである。

（表６－７、図６－６）

図６－６　「い」の作付面積、収穫量及び10ａ当たり収量推移（主産県）



イ　10ａ当たり収量

主産県の10ａ当たり収量は1,150kgで、前年産に比べて10％下回った。

これは、１月及び春先の低温等の影響により、生育が抑制されたためである。

（表６－７、図６－６）

ウ　収穫量

主産県の収穫量は9,640ｔで、前年産に比べて1,860ｔ（16％）減少した。

これは、作付面積が前年産に比べて減少したことに加えて、10ａ当たり収量が前年産を下回ったためである。

（表６－７、図６－６）

エ　畳表生産農家数及び畳表生産量

「い」の生産農家数は653戸で、前年産に比べて52戸（７％）減少した。

このうち、畳表の生産まで一貫して行っている畳表生産農家数は638戸で、前年に比べて53戸（８％）減少した。

なお、平成22年７月から23年６月までの畳表生産量は387万枚で、前年に比べて18万枚（４％）減少した。（表６－７）

表６－７　平成23年産「い」の作付面積、10ａ当たり収量及び収穫量（主産県）

区分	「い」生産農家数	作付面積	10ａ当たり収量	収穫量	前年産との比較						（参考）		畳表生産農家数	畳表生産量
					作付面積		10ａ当たり収量	収穫量			10ａ当たり平均収量対比	10ａ当たり平均収量		
					対差	対比	対比	対差	対比					
	戸	ha	kg	t	ha	%	%	t	%		%	kg	戸	千枚
主産県計	653	838	1,150	9,640	△ 61	93	90	△ 1,860	84		91	1,270	638	3,870
福岡	20	13	1,180	153	△ 4	76	102	△ 45	77		95	1,240	26	83
熊本	633	825	1,150	9,490	△ 57	94	90	△ 1,810	84		91	1,270	612	3,790

注：主産県とは、福岡県及び熊本県である。